

## 第9回もうひとつの住まい方推進フォーラム 2013

### 名古屋発！超高齢社会を生きる！～わづらわしくも、楽しい住まい・まちづくり～

平成25年11月17日（日）、名古屋市緑区にある南生協病院で「第9回もうひとつの住まい方推進フォーラム 2013」が開催されました。このフォーラムは、「もうひとつの住まい方推進協議会（AHLA）」が主催し、過去8回は首都圏で開催されてきました。

今年は、初めて首都圏を飛び出し、福祉の基盤でもある住まいとまちづくりの在り方、地域における住まいと福祉をつなぎ、地域の活性化を図る“多機能複合”事業の可能性と、超高齢社会における住まいとまちづくりについて議論が行われました。

愛知県建設部星野広美技監の来賓講演に始まり、吉田一平長久手市長、延藤安弘氏（NPO法人まちの縁側育み隊代表理事）、小林秀樹氏（千葉大学教授、AHLA代表幹事）による鼎談、市民、民間事業者による事例報告、全体ディスカッションが行われました。

鼎談や全体ディスカッションの一部内容について、同フォーラムに参加した市職員の感想とともに紹介します。



司会役の小林氏からテーマである「混ざりあい、支えあい、分かちあい」についてそれぞれの考えについて質問がありました。

延藤氏は、「まちづくりは『いろいろな人の混ざりあい』『強さと弱さの支えあい』『楽しさの分かちあい』である」とし、吉田市長は「雑木林を暮らしの座標軸にしている。雑木林は『いつも未完成』で『混ざって暮らしている』。そして『ゆずりあっている』。混ざるともめる。だからこそ人間関係は『だいたい、ほどほど、まあまあ、適当』と大らかに考えることが必要ではないか」と答えました。

延藤氏は、名古屋市の長者町で「NPO法人まちの縁側育み隊」の活動をされてみえますが、長者町に関わる人々は圧倒的にまちに対して無関心であり、それをどうしたら良いか考えたとき、みんなの「眠っている心の中のころざし」を盛り立てようと考えられたそうです。そこで地域の方と協働して、「元気経済」「混ざりあい」「共生の文化」を掲げたまちの20年先のビジョン（マスタープラン）を作られました。こうした活動は、「まちの宝物探し」であり、宝物は「それぞれの心の中にある」とおっしゃっていました。

また、吉田市長が、現在、長久手市において地域福祉計画や生涯学習基本構想など様々な計画を策定していることを紹介し、「行政だけでこうした計画を作ると市民は誰もその内容を知らない。それでは、本当に市民のための計画にはならないので、市民と市職員が一緒に作るよう指示している。市民と職員が一緒に作ると、もめることもある。もめるとそこに物語が生まれ、自分の言葉で取組みを話せるようになる。自分の言葉で人に話せて初めて、携わった計画が自分のものになる」と発言したのを受け、延藤氏からは、「キーワードは“ものがたりのあるまち”。混ざって暮らすと、絶えず、しくじり、トラブルがある。失敗力が市民の強さ、市民力になる。乗り越えるコツは、『トラブルをドラマに変えられる』『トラブルを新しいチャンス、エネルギーだとポジティブに捉える』『過程を楽しむ心持が大切』で、まちづくりを実現するには、トラブルは逃れられないことなんだ」とのコメントがありました。

全体ディスカッションでは、会場となった南医療生活協同組合の成瀬幸雄専務理事から次のようなお話がありました。

「今の日本の社会は70代、80代、90代の方の生きがいを作り出していない。だからこそ南医療生協では、高齢期の生きがい、働きがいを作り出したいと考えている。また、今後、80歳以上の40%が障害者手帳を持つと言われている。障がい者が日常的にいる世の中がやってくる。だからこそ『お互いさま』のまちづくりが必要となる。地域の人が出て実施する事業は、必ず成功する。人が足りないなら、南医療生協では組合員同士が声を掛け合い、誘いあう。何事も『南医療生協がやる』ではなく『南医療生協でやる』と考えている。地域が用立てし、地域が動くことが大切だと思う。

今回のフォーラムは、民間事業所、市民活動の取組みを知る良い機会でした。そして、その方々のパワーに圧倒された4時間でした。

延藤氏のお話を伺い、「トラブルをドラマに変えられる力」「過程を楽しむ心持ち」を持つことが、長久手市に必要なことだと思いました。そのためには、やはり市長が常々言ってみえるとおり、地域に出て、市民のみなさんと膝を交えて話をする機会を積極的に持つことが必要だと感じました。一緒に語らい、「実は、市はこんなことに困っている。力を、知恵を貸してほしい」と話せる関係を一人ひとりの市職員が、多くの市民と作ることが、市民のみなさんの役割づくり、居場所づくりの第一歩になるのではと思います。

